

論文

現在を生きる台湾日本語世代の日本語による ことばの活動の意味

佐藤 貴仁*

概要

かつて日本に統治されていた台湾では、同化政策の一環として国語教育を行っていた歴史がある。その時代に教育を受けた人々は日本語世代と呼ばれ、今もなお日本語を自在に操る。その日本語世代が集う場所として、玉蘭荘という施設があり、ここでは日本語による活動が行われている。この玉蘭荘に通う日本語世代2人にインタビューを行い、戦後から現在にかけての生活および日本語との関わりならびに、玉蘭荘の捉え方から、彼らにとっての日本語によることばの活動の意味を考察した。

キーワード

日本統治時代, 国語政策, 日本語世代, 玉蘭荘, ことばの活動

1. 日本統治時代の国語政策

1. 1 同化政策によって誕生した日本語世代

台湾に日本語世代¹と呼ばれる人々がいる。かつて日本による統治が行わ

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (sato@soon.com)

1 「日本語世代」という用語は丸川(2000)から積極的に使用されているようである(安田, 2011, p. 16)。類似の呼称として「日本語人」「日本語族」という用語もあるが、それらは「日本語を使用する台湾人」という意味を内包しているものの、時代性という観点から希薄である。よって、本稿では「世代」に焦点を当てるため「日本語世代」という用語を使用する。ただし、台湾のその世代に該当する誰しもが日本語に

れていた台湾では、同化を目指した政策の一環として、日本政府が台湾人子弟に対し、日本式の教育を日本語で行っていた歴史があり、日本語世代はその時代に教育を受けた台湾人の呼称の一つとして認識されている。この日本語世代を生み出すこととなった統治時代の初等教育段階における教育システムの確立は、1898年に実施された公学校規則²⁾に端を発する。この規則における公学校の教育主旨は、「実学を授け」「国語に精通する」ことにあり、その修業年齢は8歳から14歳に限られたものであった。また、1904年に行われた規則改正では、これまであった「漢文科」がカリキュラムから外され、新たに日本本土と同様の「国語科」が新設された。つまり、媒介言語に依存しない本格的な日本語教育の導入により、「国語」が担う機能がはっきりと付託されたことで、日本語を介して行う同化教育の側面が一層鮮明となったのである。

だが、一見軌道に乗ったかのように見えた公学校規則による教育は「台湾教育令の公布される大正八年（1919）まで、実はあらゆる方法を試み、試行錯誤の連続そのものだった」（蔡, 1989, p. 31）と記されているように、その実態は、統制の取れた教育システムを確立するための模索期間であったといえる。こうした期間を経たのち、台湾教育令の発布が実現されることになり、この施行を機に「台湾の教育制度は確立され、日本語教育の体制が整った」（蔡, 1989, p. 57）ことから、ある一定水準に達したと言うことができよう。この台湾教育令は、公学校規則の主旨であった国語という言葉に精通させる教育に留まらず、台湾人子弟を「日本人同様に化育する」方針をとり、より徹底した同化主義を標榜したとされている。よって、1919年（大正8年）以降に初等教育を受けた台湾人は、制度としては「日本人」同様の教育を受けることになったという歴史的経緯に鑑み、本稿でも堀江（2006）に倣い、台湾教育令発布以降に教育を受けた者を「日本語世代の台

よる教育を受けていた訳ではない。

2 1898年2月施行。「公学校」とは台湾人子弟を対象とする初等教育機関であり、台湾に居住する日本人子弟を対象とした「小学校」とは別に設置されたものである。なお、終戦直前の1944年における台湾の初等教育就学率は70%超に達していた（陳, 2001, p. 36）。つまり、当時の学齢期にある台湾人の約7割が日本語による教育を受けていたことになる。

湾人³』と定義する。

1. 2 現代を生きる日本語世代とその日本語

2008年に公開されたドキュメンタリー映画「台湾人生」には、5人の日本語世代の人生の語りが収められている。書籍化された同名の本（酒井、2010）には「台湾には日本語を話すお年寄りがたくさんいる、ということは聞いていたが、実際に話したのはそのときが初めてだった。あまりの流暢な日本語に驚き、戦後50数年を経ってなお子供のときの恩師を大切に思っているその気持ちに打たれた」という一節がある。また、平野（2007）では、元々別の目的で取材をした日本語世代が、戦後60余年が経過しているにも関わらず、誰もが自分の人生を熱く語り始める姿に、言葉にならない感情が押し寄せたとする思いが綴られている。このように、現代において日本語を流暢に話す彼らの存在自体が、ある種の驚きと感動を持って伝えられている一方で、その当事者である日本語世代と呼ばれる人々が、現在をどのように生き、どのような言語生活を送っているのかといったことに関する言説は相対的に少ないように思われる。もちろん、先述の著作などでは、彼らの今現在の暮らしぶりが示されることはあるが、ごく一部の提示に終わっているため、今を生きる彼らの日々の営みについて、厚みを持って推し量ることは困難である。

本稿は、統治終了後の台湾社会において、社会の使用言語が日本語から中国語に切り替わった世界を生きてきた、ある日本語世代の日本語との関わりについて考察するものである。戒厳令下における日本語使用が禁止された時代を経たのち、戒厳令解除に伴って、再び自由に日本語を使用できる環境になった現代を生きる彼らが集うコミュニティにおける言語生活に目を向けるとともに、その中の日本語による活動が、彼らにとってどのような意味を持つのかを探る。次章に詳述するが、そのコミュニティとは高齢者を対象としたデイケアセンターであり、そこでは台湾にありながら日本語で活動が行われている。私が初めてその施設を訪れたのは2008年になるが、活気に満ちた雰囲気の中、日本語世代の人々とスタッフが活き活きと話す姿に触れ、ま

3 大正から昭和初期に生まれ、日本語教育を受けた世代の華人系台湾人（いわゆる「本省人」）を指す。（堀江、2006、p.94）

さに自分たちのことばとして、皆が日本語で繋がっているという強い印象を受けたことが、この研究の原点になっている。彼らにとっての日本語とは何か。なぜ戦後70年近くを経過した今もなお日本語を話し、日本語によるコミュニケーションにこだわりを持っているのだろうか。本研究は、戦後における彼らと日本語との繋がりを、インタビューで語られた内容をもとに考察することならびに、老年期になって属することになったコミュニティの捉え方から、そこで行われている日本語によることばの活動の意味を考えることを目的とする。

2. 調査の概要

2.1 玉蘭荘について

本稿を論じるにあたり、2人の日本語世代にインタビュー調査を行った。まず、それをするために全面的に依拠した玉蘭荘という施設について説明したい。玉蘭荘は台湾にありながら、日本語で活動を行っている高齢者のためのデイケアセンターである。キリスト教団体が母体となって1989年に誕生したこの施設では、基本的に1週間に2回活動を行っており、その内容は、毎回必ず行っている牧師を招いての礼拝のほか、歌唱や詩吟、習字や英語、医学講座など多岐に渡る。また、遠足やバザーなどの催し物に加え、日本の高校生や現地の日本人学校の児童生徒との交流会なども、不定期で実施されている。では、そこに集まっているのはどのような人々なのだろうか。玉蘭荘のパンフレットには、会員に関する以下の説明がある。

1. 過去50年に及ぶ日本統治時代(1895年~1945年)に当時強いられた日本教育により、文化や習慣までも影響を受けてきた台湾の人々(台湾生まれの日本人も含まれます)。既に日本教育により自己形成がなされてきたこの人々は、戦後再び台湾の教育を強いられるという境遇におかれまして。
2. 日本統治時代に台湾の男性と結婚した日本婦人で、その後も家族と台湾に残り、子供を育て上げた人々。
3. 戦前日本より中国大陸に渡り、敗戦後現地で中国人と結婚し、夫と共に台湾に移り住んだ日本婦人。

本稿で取り上げる日本語世代の2人は、上記の1.に該当する。現在、玉蘭荘に通っている9割弱の会員が日本語世代であり、日本教育を受けた期間の差こそあれ、そのほとんどが台湾教育令施行後の公学校において教育を受けた経験を持つ、日本語を自在に操ることができる人々である。

だが、皆がこれまで常態的に日本語を使用してきた訳ではない。彼らの公的な日本語の使用は、戦後間もない時点で終わっている。1947年から日本語に関する様々な禁止令が段階的に施行されたのに続き、1949年に戒厳令⁴が発令されたことにより、公共の場における日本語使用は一切禁止され、日本文化も排除された一方、中国語や中国文化が台湾に入ってきたことで、公には、彼らの日本語の人生はそこで終焉を迎えることになったのである。

このように、日本語世代の人々は「日本人」として日本語で教育を受け、日本語を日常的に使用していた過程で終戦を迎えたのち、今度は「華人」として中国語の使用を強制させられる境遇におかれたという歴史的転換を経験している。本稿で取り上げる玉蘭荘の会員である2人もこれに該当し、それぞれ10代半ばから後半で終戦を迎えている。この2人は玉蘭荘の会員の中でも比較的長く参加している人々であり、毎回欠かさず参加していることから、日本語による活動には一定の意義を見出していると言えるだろう。

では、こうした人々が玉蘭荘に集うその意味とは何か。自分の言ことばとして日本語を常用していた世界から70年近くの年月が経過している現在においてもなお、日本語による活動を求めて玉蘭荘にやって来る、日本語世代の語られた記憶を再構成する中で、日本語との関わりに着目しながら検討していきたい。

2. 2 調査方法

本研究では、ライフストーリー研究法を用いた。ライフストーリー研究とは、「日常生活で人々がライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と、語られた物語についての研究」（やまだ、

4 1949年に施行、1987年に解除された。戒厳令下においては、集会・結社・言論活動などの自由が制限され、一般民衆に対する厳しい監視と政治的な抑圧が常態化し、いわゆる「白色テロ」（国民党政権に敵対的である人物に対する粛清の実施など）の時代が続いた（五十嵐、三尾、2006、p. 325）。この間、社会における日本語の使用も原則的に全面禁止された。

2000, pp. 146-147)である。また、ライフストーリーは、「自分の人生（生活）経験を表現するのにもっとも適したコミュニケーションの形態」（桜井, 2002, p. 61）であり、「『語り』そのものを研究対象としている」（山口, 2004, p. 11）ことから、人生の経験についてインタビューを行い、聞き手との相互行為の中で語られた内容を分析する本研究に適していると判断し、この方法を採用した。対象の2人は表1のとおりである。この2人を採り上げた理由として、先述した玉蘭荘の会員歴が長いことに加え、戦後に日本語が排除された社会の中においても日本語に触れることを希求し、自分なりの方法で日本語との繋がりを保っていたことが、別々の場所でそれぞれの人生を送っていた両者の共通点として見出せたからである。さらに、老年期になって玉蘭荘という施設を知り、そのコミュニティに自分の居場所を求めるまでの軌跡や、彼らにとっての施設の存在理由にも共通した部分があった。このことから、同時代を生きた両者が語ったことばの人生を捉え、日本語がそれぞれの人生にどのように関わっているのかという部分に着目することで、彼らの人生における歴史の積み重なり的一端が見られると考えた。分析にはインタビューによって得た録音データを文字化した口述資料を使用した。その中から、特に、日本語、および戦後の生活や玉蘭荘に関する語りに着目して重要と思われる部分を抽出し、話の時系列に沿ってストーリー化した。このインタビューの再文脈化によって組み立てられたデータを元に、次章を記述していくことにする。

表1 調査協力者*

仮名	性別	年齢	出身	玉蘭荘会員歴	インタビュー日	インタビュー録音時間
李さん	男	84	宜蘭	15年	2012年4月2日	41分40秒
呉さん	女	86	新竹	21年	2012年4月30日	73分24秒

*年齢、会員歴はインタビュー当時のもの。

3. 日本語世代が辿った道

3.1 李さんが辿った道

李さんは16歳で終戦を迎えた。海軍特別志願兵の第2期生として、台湾

南部の W 市で訓練を受けていた時のことである。そのほぼ一か月後の 9 月半ばに軍隊は解体し、故郷である台湾東部の X 県に戻ったのを機に、出兵以前に勤めていた営林署に再び勤務することになった。営林署は公的機関であるため、戦前に管轄していた日本政府の役人と入れ替えに、国民党政府の役人が上層部に納まった。父親も同じく営林署に勤務していたが、小さな村だったため、できるだけ目立たないように、身を潜めるように暮らしていたという。本人曰く、自分は「下っ端」の人間であるため、上層部とは直接中国語を話す機会もなかったこと、また生活や政治的な思想においても価値観の違う彼らとは、心理的にも距離を置いていたこと、さらに、元日本兵であることから目を付けられないように、おとなしくしていたと語る背景には、1947 年に起こった二・二八事件⁵やその後が続いた戒厳令および施行されていた期間に起きていた白色テロの影響があると思われる。こうしたことから、国民党政府や職場の体制に対しては抵抗感を持っていたという。

また、その当時も軍隊時代の同年兵との同期会などに参加する機会があったが、限られた相手以外に対し、個人的に連絡を取ることはほとんどなかった。戒厳令下において、公に日本語を話してはいけない、日本語を話す誰かとは表立って会ってはならない、という観念を植え付けられた李さんは、そのような相手と会う際には、かつて中国の敵であった日本の兵隊である自分が清算されるかもしれないという恐怖心を感じながらも、「現代の逢引きみたい」に秘密裏に会っていたという。

終戦を機に自分が「日本人」ではなくなったこと、社会的に日本語が使用できなくなったことについては、「家庭の規則」になぞらえて、「失望感」「挫折感」という言葉でその気持ちを語っている。それは、これまで身につけてきた「家庭の規則」を捨てて、また別の新しい「家庭の規則」に従わなければならないという思いである。つまり、教育を受け、日常でも常用していた言語である日本語を捨て、中国語という新たな言語を一から覚え、その

5 1947 年の 2 月 28 日より 3 月中旬にかけて台湾人と政府側との間に発生した衝突事件。政府側が、台湾人に対する無差別虐殺を含む過酷な弾圧を行い、抵抗を鎮圧した。犠牲となった人の数は 18,000 から 28,000 の間であろうと見積もられている（何, 2003, p. 1）。

言語の世界の中で生きなければならないという現実で失望したのだろう。もちろん、戦中から家族とは台湾語で意思疎通を図っていたが、その時代は日本語が中心の社会であったこと、また、台湾語は読み書きには用いられない生活言語であり、学校教育や教養を身につけるための言語は100%日本語であったことから、社会的にその使用を禁止された心情を「失望感」「挫折感」という言葉で表したのかもしれない。社会の変化に追いつくため、中国語を身につけることも試みたが、やはり中国語話者とは心理的な「距離感」があり、「彼らとはあまり付き合いたくないというような」気持ちから馴染まなく、殻に閉じこもりがちの生活を送るようになる。社会の言語が中国語に切り替わった世界において、これまで普通に日本語を使用してきた自分は何一つ変わっていないにも関わらず、取り巻く社会は大きく変化してしまったという現実の中で、何か取り残されたような感覚から自身の存在意義が見出せなく、毎日をただ過ごす日々が続いたのである。

生活はできますよ…この、何ですか、毎日が楽しくなくて。毎日が苦悶です。生活のためには黙々とやらなければならないんです。仕事は一番下っ端です。だから…あの一、色んなことをしなくても、ただ黙々とやれば。寂しいですよ。正直言いますと、私の人生は暗いです。

このように語る李さんにとって、大きな心の支えの一つとして、子供の成長、特に、自分が考えるいい教育を施すために、心を砕いていたことが挙げられる。「正直言いますと、大きいことは考えないんですよ。ただ生きるために努力しているだけです。仕方なく、自分を犠牲にして。子供は子供の…それはやっぱり、教育を受けなきゃいけないんですよ」「教育だけは、私は教育だけは受けさせて、あとの発展は自分で…」「私が子供にしたことは、ただ子供に学習させたいということだけです。あとは自分から自分の道を歩いたら」というように、いかに子供に教育を受けさせ、自立した道を歩ませたかったかということを繰り返し語るのである。これは、自分自身が国家や政治に翻弄された経験から、たとえ今後、再び社会の変化が起きようとも、社会の枠組みに囚われない自立した人間に育ててほしいという願望の表れであるのと同時に、自分が成し得なかったことを子供に託す行為であったのかもしれない。

もう一つ、戦後の生活において、李さんが精神的な拠り所にしていただ

がある。それは日本語の書物を読むことである。そのことについて、「めくって、めくって。もう、14, 5歳から、はや読み始め、そして戦後もずっと、日本の雑誌やなんかを読んでいました」と語る李さんだが、なぜ書物を読むことに夢中になったのだろうか。その理由を以下に語っている。

若い人らというと向上心があります。そして…この、学問というものは、どこの…知ってるもの（言語）は、どこでもいいんですよ。台湾語以外に中国語なんか、また一からやらなければならないから。あまり好かないですよ。そしてこの、日本語でこう、何ていうかな…もう、十数年使っていますから。だから、あの時も、若い時は面白味もあって、学習本も読みました。そして小説も読みました。前に進みたいというような気持ちもありました。

李さんの幼少時は、当時の時代背景から考えて、公学校卒業をただけでも「最上」であったし、そもそも X 県の山間部という人口が少ない地域には、進学先そのものがなかったと考えられる。学校へ行かない代わりに、教養を得るため、知的好奇心を満たすために読書に耽ったことや、それを満たすためには、自分に染み付いた言語、また、読み書きが可能な唯一の言語である日本語によってしか、手段がなかったのかもしれない。あるいは、そうした行為に没頭することは、楽しくなく、苦悶した毎日を単に忘れさせてくれるものであったのかもしれない。

こうした書物は「船員」や「商業をやっている人」が日本から持ち帰った雑誌であったり、「ザオソー」と呼ばれる闇業者から手に入れたりするなどして、同じ日本語の書物を読む仲間内で、回し読みをしていたという。そうした状況が「2, 30年は続きましたね」と語っていたことや、職場のある村は原住民部落の近くであったため、彼らとは共通言語の日本語で話す機会があったことから、生活において日本語に触れる機会は日常的に持っていたことが分かる。

しかし、ふとしたことから近所の人に日本語で活動を行っている玉蘭荘の存在を聞き、「あんた日本語知ってるから、行きなさいよ」と勧められたことがきっかけで、1996年に初めて訪れたという。そこで、親兄弟以外では近所に住んでいる原住民の人々、そして、元海軍の同年兵の集まりで昔の仲間にあう時など、それまでは限定された場でしか日本語を話していなかった

李さんが、同じような境遇を辿った同世代の日本語を話す台湾人が集まる玉蘭荘というコミュニティに属し、そこで日本語による活動を行うようになったのである。すでに15年に渡り継続して参加している玉蘭荘での活動について、李さんは以下のように語っている。

どうかというと、この、日本語を話すということは、私はずっと、終戦からずっと、ずっと話しています。だから…この、この、日本語で活動すると、ちょっとこの、いい感じがします。いや、この、小さいときから、この…何ですか、国家が変わっても、人と人との付き合いがね。言葉で繋がっているような感じがすね。そしてここに来ている人はみな年寄りでしょ。だから話に通じます。世代が同じな人で。若い人らというと、この、生活習慣も違うし。同じ世代の人はこう、なんとなく解け合います。

李さんが述べる玉蘭荘での日本語の活動は、その話し振りから単なる日本語のやり取りではなく、「人と人との付き合い」が「言葉で繋がっている」ことを実感するものであることが窺える。そして、同世代の同じような境遇を辿った人々との集いにおいて、そのコミュニティのメンバーとは「何となく解け合う」ということから、たまたま近所にいたという原住民との交流や、書物から情報を得ることや単にその言語の世界に触れる手段として、日本語を用いるという一方的な言語活動とは、意味が違っていることが分かるだろう。なぜなら、日本語を使用するといっても、単なる情報交換としての交流や情報収集としての手段による日本語使用からは、人と人との繋がりは実感できないからである。李さんはずっと自分のことばである日本語で、ある日を境に途絶えてしまったコミュニケーションをしたかったのではないだろうか。コミュニケーションとは、自分の思いを相手に発信し、相手を介してまた受け取るという「思いの循環」である。それこそが人と人との絆を結べる唯一の方法だと考えるのであれば、李さんにとっての玉蘭荘における日本語の活動は、ただ日本語を使用するという行為自体に意味を持つものではなく、自分と他者の思いを循環させる生きたことばの営みを行うための手段だと言えるのではないだろうか。

3.2 呉さんが辿った道

呉さんは1926年生まれの客家人である。台湾のY県の出身だが、6歳の

時に一家で Z 市に移り住んだ。その後の生活は「学校、職場、そして結婚。みんな Z 市」だという。現在理解できる言語は客家語、台湾語、中国語、日本語だが、その中でも日本語が一番「得意」であり、最も自分に馴染んでいる言語であると語る。

もう小さい時からみんな日本語、日本語で育ったから。だから私はね、日本語がほんとに私の母国語とおなじ。

自分にとって日本語は母語同様だと語る呉さんであるが、統治時代における自分についても、「日本人になれた方が嬉しいんですよね、台湾の人と言われるよりもね」と語っている。また、当時は他者から「そう言われるのが嬉しかった」ということから、自ら「日本人」と規定されたがっていたことが分かる。それは、公学校において日本人教員から「台湾の人でも、日本のように教育された」と懐かしんで語るように、外地の「日本人」として、本土や小学校に通う日本人と同様の日本式教育を受けたことを今でも「よかった」と思っていることから窺える。

しかし、1949年に戒厳令が発令されたことにより、公共の場での日本語使用は一切禁止され、日本文化も隅に追いやられていった。社会の変化に伴い、日本出自のものは徐々に脱色化され、中国語や中国文化に取って代わられていったのである。戒厳令下における日本語使用の禁止時には、「日本語で話したらいけないという観念」が常に頭にあったこと、また、当時の風潮に合わせて生活することで、日本語を使用する機会は減少していったという。

でも、小さい時にね、個性、観念からして日本の方と同じように育てられて、日本人と同じような考えで育ってね。だから、やっぱり日本のやることすべてが、私たちには気に合う訳ですよ。

そして、中国人のやることには、本当にもう目を瞑りたいぐらいね、嫌な時もあるんですよ。何て言うのかしら、私たちが今まで習ってきたことや教わってきたことと全然違うでしょ。それにある程度、反感を抱いたりするんですよ。

当時進められた国民党政府による徹底した中国語普及政策により、台湾社会は短期間で中国語使用が当然であるという世界に変化した。しかし、戦後ほどなくして結婚した呉さんは家庭に入ることになり、社会との接点が限ら

れるようになったため、しばらくは中国語を使用せずとも暮らしていったのである。だが、のちに子供を持つようになったことで、外の世界との繋がりが生まれ、「正式には習っていない」中国語も、「病院へ行ったりすると、みんなが中国語で話すから、それにつられて」話すようになり、また、中国語で学校教育を受けている子供を通して、身につけていったりもした。しかし、上述のとおり、感覚的に嫌悪感を抱いてしまった中国語の世界に自身の生活全体をシフトさせることはなく、子供の世界を通じた生活の変化があっても、李さん同様、日本語の雑誌を「順繰りに回して読ませてもらっていた時もあった」ことや、クリスチャンである自身の生活を通して、ずっと日本語と繋がっていたことで、自分を支えていたことが窺える。

自分なりにね、聖書を日本語のを使ったりね。お祈りも日本語で、日本語でお祈りしたりして。離れることがなかったんです。意識的じゃなくて、もうほんとに自然に私のものになってしまっているんですよ、日本語がね。ここ、日本語で言わなきゃならんっていうような、ああいう気持ちもなくて、やっぱり口から出る、頭から、頭で考えることすべてがみんな日本語。日本語なんです。もう忘れることはないですよ。日本語以外に私が、そのね、意思を表示する能力なんてないですよ。

戒厳令下の台湾では、集会・結社などによる人々の集まりは厳しく禁じられていた。しかし、宗教であれば堂々と集まることができたことから、そこで同じような境遇に置かれた日本語世代同士の礼拝を通じた日本語による交流もあったかもしれない。また、そうしたことも、呉さんの人生を支えるものになっていたことも考えられるだろう。しかし一方で、社会で使用されるようになった中国語と接点がない家庭中心の生活でも、第一言語が中国語である子供から少しずつ習得するようになり、学校の勉強を見るため、「子供が学校に行ってる間に、自分でも中国語を少し勉強したり、本を見たりする」ようにもなっていた。こうして、家庭においても徐々に中国語の世界に染まっていったが、それでも自然に出てくるのは日本語であり、決して「日本語から離れることはなかった」と語る呉さんにとって、玉蘭荘の活動やその存在とは一体どのようなものなのだろうか。

そうねえ。もう一生…もうすぐ尽きますでしょうけど、一生懸命求めたものがね、こうして実を結んでくれたら、それで満足だと思ってい

ます。ここに来ると非常にこう、何て言うのかな、中国人が集う、その集いで感じられない和やかさを感じるんです。だからここに来るとね、一度来たらなかなか離れないんですよ。みんなが続けて来るんです。玉蘭荘の活動には参加してから 20 年くらい。あの、皆さんにお聞きしてもきっとおんなじだけどね、本当に何て言うかね、あの、年がいつているっていうことが一つね。そして、みんなお互いね、自分の苦しんできた道程がね...戦争に遭ってきたでしょ。その苦しみもともに歩んできたしね。だからここに来るとね、何だか家族のように...他人のような感じがしないですよ。そしてみんな非常に仲良くしてね。あの、月に何回かおしゃべり会というのがあるんですよ。私たち自分の、各々自分の、この環境を話すんですよ。非常によかったです。ほんでみんながね、ここに来てほんとにいいのはね、ここに来たら自分のお家へ帰ったみたい。もう、自分の第二のお家。自分のおうちの他にね、もう一つの、あったかいお家がここにあるっていうような感じ。

ここで言われている「一生懸命求めたもの」というのは、当たり前のように日本語を話していた「日常」ではないだろうか。以前は普通にあったものが、終戦を境にそれが途絶えてしまったその後の人生において、再び日本語によることばの活動ができることを求めて止まなかったのかもしれない。そして、人生の最終段階において、それが実現できた玉蘭荘に対しては「第二のあったかいお家」とであると喩え、そこに集う人々は「家族のよう」に仲がいいと話していることから、李さんと同様、単に日本語を話す場ではなく、集まっている仲間たちとの繋がりを実感するために活動を行う場として、玉蘭荘が存在しているのだろう。

4. 考察とまとめ

2 人のライフストーリーインタビューの語りから、日本統治下においては、それぞれが日本語で教育を受け、日本語を話す者としての自己認識があったことが窺えた。

李さんは自身が自ら志願した「日本兵の経験者」であることを大切に思う

一方で、戦後大陸から渡ってきた人々とは「価値観が違う」ことを自覚していた。また、「日本人」ではなくなったことに失望し、中国語使用の社会となってからは、その言語が理解できず、その世界において、ほぼ第一言語である日本語を話すという自分自身の存在意義が見出せなくなっていた。

呉さんは自分を「日本人と同じように育てられた」人間であると認識し、他者からは台湾人言われるよりも、「日本人」と言われた方が嬉しいと語り、幼い頃から日本語という言語で育てられたことから、日本語は「母国語と同じ」であると自ら規定していたことが分かった。

このような両者にとって、日本の統治時代には当たり前のように存在していた日本語によることばの活動という営みが、終戦によって終焉を迎えたことが意味することとは何なのだろうか。

4. 1 彼らにとっての日本語の意味

「日本人」として日本語で教育を受けたにも関わらず、敗戦を機にもう「日本人」ではないと言われ、日本語の代わりとして中国語を与えられたことから、彼らのことばとの葛藤が始まった。社会における使用言語が中国語に代わり、法的にも表立っては日本語が使用できない状況にあっても、その中で日本語の世界を希求し、日本の雑誌や書物を読んだり、日本文の聖書を使用したりするなどして、自分ができる方法をもって、日本語との繋がりを保っていたのである。戦後の社会で「毎日が楽しくなく、寂しく、暗い」人生を送っていたという李さんや、大陸から渡ってきた人々がすることに「ある程度の反感を抱いていた」という呉さんの語りからは、そうした自分を支えるための手段として、半ば無意識的に日本語を求めているように思える。それは「日本語」という言語そのものに意味があるから、という理由ではなく、自分のことばとして、人と繋がる手段として、かつて日本語を日常的に、ごく普通に使用していたからにはほかならないのではないかと。そしてそれは、戦後70年近くを経た現在においても、個人の中に継続して息づいているのである。

20年以上に渡って、日本語世代である会員に接してきた玉蘭荘のボランティアであるAさんは、彼らを身近に感じ、そしてつぶさに彼らを見てきた経験から、ことばについて以下のように語っている。

ことばってね、本当に微妙な…だけどすごく力のある、支配するもの

なんですよ。だから、人生を支えるんですよ、ことばは。いいにも悪いにもね。大事な、人間が扱える道具ではあるんだけど、心のある道具だから、これは難しいですよ。普通の血の通わない道具は簡単に、練習すればすぐ学べるけど、ことばはそうはいかないし、その裏に心が入ってくると、それ以上に難しい。

こうして考えると、台湾人子弟を同化させるための道具に過ぎなかった日本語が、彼らの人生を支配し、そして支えるもの、いわば、彼らの心=ことばとして存在するものになっていたと言えるのかもしれない。

ある言語を母語（またはそれに近い『教育言語』）として身につけるには、自分の意志に関わらず、ちょっとした偶然やその時の状況によるところが大きいと言える。李さんや呉さんについても、日本の植民地下に生まれ育ち、学齢期に日本語で教育を受けることになったのも、その当時の状況によるものであったからに過ぎない。しかし、手段としての同化教育で使用されたに過ぎなかった言語を、自分を表現することばとして、それを身につけてしまった人たちのその後の人生に及ぼす影響を考えると、その意味は計り知れない。なぜなら、元々は単に日本人になるために与えられた道具に過ぎなかった日本語が、当初の役割とはまったく形を変え、彼らの一部となったことで、その人自身にとって非常に大きな力を持つものになっていたからである。

4. 2 彼らにとってのことばの活動の意味

玉蘭荘のボランティアである A さんは、施設開設当初から継続して活動を行ってきた。開所当時は、戒厳令が解かれて間もない頃であり、いわゆる日本語世代と呼ばれる人々が社会的に認知され始め、日本語による集会が公に認められた時期と重なっている。当時は今ほど情報が発達していなかったことで、日本語世代が辿ってきた歴史について知る術がなかったことに加え、自身も台湾に移って間もない頃であったため、右も左も分からない中、手探りで活動してきたという。

活動に関わった当初は、玉蘭荘は高齢者を対象とした福祉施設という側面が大きく、施設の方針としても、日本の高齢者ケア方法の導入など、技術的な部分を主眼に置いたケアセンターを作るという目的があったという。しかし、A さんはそのような方針に、どこか違和感を持っていた。医療的なケア

の方法や高齢者のための福祉の在り方など、知識として必要な部分も当然あると理解した上で、それでも日本語世代である会員が欲していることは、そのようなものではないのではないか、という気持ちを持ちながら活動を続けていた。そして、その違和感の原因が何なのか、はっきりと気づくまでに、およそ3年の年月を要したのである。

会員が必要としていること。それは、日本人である自分が日本語で話を聞いて、日本語で他愛もないおしゃべりをするようなことであった。彼らが背負ってきた歴史的な背景をほとんど知らず、直に接する中でその考えに至ったのは、自分がどうすれば彼らが喜び、どう振る舞えば満足してもらえるのだろうか、彼らをつぶさに見て考えたからにはほかならないだろう。終戦を機に、日本人として生きることを余儀なくされていた日常から一転、ある日突然「今日からもう日本人ではない」と言われたこと、言語が日本語から中国語に切り替わった社会においては、自分が普通に日本人として日本語で生活を送ってきた過去を話しても、その歴史を習ってきていない子供の世代には全く理解されず、逆に「またおかしいこと言っている」と、家族にすら訝しい目で見られてしまうある種の断絶感を、Aさんは知識ではなく、そうした歴史を背負った日本語世代の人たちと直接話すことによって気づき、ことばによる人との繋がり的重要性を実感し、そして受け止めてきたのである。

日常的に日本語を話していた彼らは、戦後の社会において、人との繋がりを実感するために日本語の世界を希求しても、その当たり前だった現実はどうも存在せず、中国語の社会に切り替わった世界を生きるしかなかった。それでも可能な限り、自分なりに日本語を求め続けたのは、表面的にはその時代に自分を合わせてはいるが、どこか馴染めず、社会からはみ出してしまいそうになる自分を堪えさせるための行為であったのかもしれない。しかし、それでも2人は飽き足らず、日本語を介した人との繋がりを求めて、最終的に玉蘭荘に行き着くのである。この玉蘭荘における活動は、メンバー間における単なる日本語のやり取りではない。李さんは玉蘭荘が「人と人との付き合い」が「言葉で繋がっている」ことを実感していることを語り、呉さんは同じ道程を歩んできた同志を「家族」のような存在と捉えることで、「第二の家」と表現している。つまり、会員同士が日本語ということばを介した「思いの循環」をすることで、他者との関係を築き、絆を結ぶことができる

場所だと言えるのではないだろうか。そして、同世代の同じような境遇を辿った人々とは「何となく解け合う」ということから分かるように、仲間と繋がりを実感する場所であると捉えることもできるだろう。

自分一人で日本語の書物を読むことや日本語でお祈りをする 것도、言語活動の一環と言える。しかし、そうした行為に飽き足らず、自分のことばである日本語で交流のできる場所を探し求めたのはなぜだろうか。それはやはり、ことばの活動というものは本来、他者がいなければ成立しないものだからであり、他者とのことばの活動を通じてしか、誰かとの繋がりは実感できないからだろう。では、なぜ日本語による活動にこだわるのか。

両者は戦前、当たり前のように日本語を使用し、日常生活を送っていた。しかし、日本の敗戦により、表立って日本語が使用できなくなってしまったという歴史を背負っている。このことを考えると、同時期に同様の経験をした両者が玉蘭荘に行き着いた意味というのは、Aさんが指摘するように、実は他愛もないことを話すというような、ごく日常的な行いを突然取り上げられてしまったことに対する葛藤と、それを乗り越え、日常を取り戻すための行為であるということに、ほかならないのではないだろうか。だとすれば、ことばの活動とは、人間同士の基本的な営みであると同時に、李さんが語るように「国家が変わっても、人と人との付き合いが言葉でつながっているような感じ」であることを実感するものであり、その活動を共にやっているメンバーに対して「何だか家族のように...他人のような感じがしない」と呉さんが語るように、人と人との繋がりを確認するためのものであると定義づけられるだろう。

エリクソン (Erikson, 1982) は老年期をライフサイクルの最終段階として位置づけ、その段階における危機を「自我の統合 対 絶望」としている。老年期は人生を振り返り、それをかけがえのないものとして受け入れることができれば、統合の感覚が得られるが、つまらない人生だがやり直す時間がないと感じれば絶望に至ると指摘している (秋田, 能智, 2007, p. 297)。しかし、物理的、状況的にやり直すことが可能な場合はどうだろうか。2人は老年期を迎えた段階で玉蘭荘の活動に参加するようになったが、これをエリクソンのライフサイクルモデルに当て嵌めて考えてみると、人生を振り返って、統合の感覚が得られていないという自分に気づき、その理由が日本

語によることばの活動の欠落であると感じ、その部分をやり直し、取り戻す行為であると捉えることができるのではないだろうか。山口（2000）は「そもそも統合とは過去を評価し、葛藤を解決し、過去を統合する試みである」としている。つまり、自分のことばとして、日常的に日本語を使用していた過去を評価し、戦後の中国語使用が当然となった社会において起こったことばとの葛藤を克服し、その過去を取り戻すことが、統合であると捉えることができるのではないだろうか。こうした一連の統合を求める行為は、意識的にはなされていないのかもしれない。しかし、今の彼らがどうしてもしなければならぬのが、失われた時を取り返し、それを埋めることなのだとすれば、現在を生きる彼らがなお、こだわりを持って行っている日本語によることばの活動というその行為そのものに、大きな意味があるのではないかと思うのである。

文献

- 秋田喜代美，能智正博（2007）．『はじめての質的研究法——生涯発達編』東京図書．
- 五十嵐真子，三尾裕子（2006）．『戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』風響社．
- 何義麟（2003）．『二・二八事件——「台湾人」のエスノポリティクス』東京大学出版会．
- 蔡茂豊（1989）．『台湾における日本語教育の史的研究——一八九五年～一九四五年』東呉大學日本文化研究所．
- 桜井厚（2002）．『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房．
- 酒井充子（2010）．『台湾人生』文藝春秋．
- 平野久美子（2007）．『トオサンの桜』小学館．
- 堀江俊一（2006）．二つの日本——客家民系を中心とする台湾人の「日本」意識『戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』風響社．
- 九川哲史（2000）．『台湾，ポストコロニアルの身体』青土社．
- 安田敏朗（2011）．『かれらの日本語——台湾「残留」日本語論』人文書院．

- 山口智子 (2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み——回想についての基礎的研究として『心理臨床学研究』18, 151-161.
- 山口智子 (2004). 『人生の語りの発達臨床心理』ナカニシヤ出版.
- やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味——なぜライフストーリー研究か? 『教育心理学年報』39, 146-161.
- Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed*. NY: W. W. Norton & Company. (村瀬孝雄, 近藤邦夫 (1989). 『ライフサイクル——その完結』みすず書房.)